ふたり空を夢みる

R.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたり空を夢みる

【Nコード】

N9711B

【作者名】

R .

【あらすじ】

友達付き合いに疲れたOL、蘭の趣味は夢を見ること。最近はおもしろい夢を見られなくなった蘭は、早起きして誰もいない公園へ散歩するようになる。そこで蘭が出会ったものとは……

腕を伸ばせば届くような近さまで、ネズミ色の雲が迫っていた。

水蒸気のかたまりから、やはり同じような色の水滴が顔の表面に落ちてきて気持ち悪い。払っても払ってもしつこく降りそそいでくるその水滴にわたしはうんざりしながら、小鳥のさえずりを遠くに聞いた。

やっと目覚める時がきた。腕を伸ばしてケータイを布団の中に引きずり込む。重なりあった羽毛の中から、小鳥のさえずりは夢の中で聞いたよりもさらに遠く、力なく聞こえた。

最近はずまらない夢ばかりみる。現実と寸分もかわらないものさえある。そんな夢をみた日は、まったく同じ日常を繰り返しているようで、何につけてもやる気が出ない。もう一度眠って、その日を夢の中からやりなおしたくなる。今朝、寝起きにみた夢は生理的に不快だった。それでも退屈することはなかったので、良いほうだろう。

1DKのせまい賃貸マンションに一人暮らし。だれにも邪魔されずに一人で生活できるのは、わたしにとってとても重要だ。

東向きの窓のカーテンを開けると、隣接する建物の隙間から昇ったばかりの太陽の欠片が目刺さる。ミニチュア観葉植物の寄せ植えに水をやる。目覚めはじめた街に、新聞配達員の自転車のブレーキ音が響いた。

以前なら、休日は昼まで寝ていた。二度寝、三度寝すると夢の奇妙さが増してくる。続きものをみるのも、たいてい休日に限っていた。

どうやってたら変な夢をみるのか。起きているあいだは、そんな事を考えながら、夢にエサを与えるかのように物語を読みふける。そして夢をみるためにまた眠る。眠っても眠っても、まだ眠り足りないくらいだった。

マンションを出ると、太陽はすでにビルの群れから頭ひとつ分高い所に位置していた。

こんな天気の良い休日は、みんな何をするのだろうか。わたしが知っていた『みんな』は、陽がすっかり傾いた頃にならないと活動しはじめない。朝帰りとか二日酔いとか疲労とか彼氏が泊まりに来ているとか、そんな理由で。

土曜日はとにかく眠るためにあるの、と言っていた『みんな』のひとりには、土曜出勤にシフトが変更された途端に仕事を辞めた。金曜の夜に朝まで友人たちと思いつきり遊べないのは、職を失うよりも許せない事だったらしい。わたしも前はそんなだったから、その子の気持はなんとなくわかる。

春らしくなつたとはいえ、土曜日の、まだコンビニしか営業していないような時間の公園には誰もいない。すべり台の下に、ほんの少しだけ汚い雪のかたまりが解けずに残っている。通り抜ける風の中に、ひとすじの悪意みたいな冷気が混じっていて、わたしの肌を時おり刺した。

三つあるぶらんこの一番右側に座ると、お尻のポケットに突っ込んできたケータイが邪魔になった。

『今週の土曜日会えなくなった、ゴメン。出張はもう勘弁してほしいよまったく……』

サイトーさんからの最後のメールだ。先週も同じようなメールが来ていた。サイトーさんの仕事は大変だなあと思うけど、会えないのはどうでもよかった。会いたいと言ったのはサイトーさんのほうだし、正直いつてわたしは会いたいと思っていなかったから。

サイトーさんのメールが届いたあとすぐに、メアドを着信拒否した。念のため教えておくよと言われたケータイ番号も、何が『念のため』なのかさっぱりわからなかったけれど、とりあえず『念のため』拒否しておいた。

先週も出張で遠くの知らない街に行っているはずのサイトーさん

を、朝の散歩途中で見かけてしまった。紺色のレンタカーで、助手席の女の子と信号待ちしていた。なんだ、出張も案外楽しそうじゃないの。ちらっとそんなふうに思っただけで、サイトーさんのことはそれっきり考えていなかったのだ。

彼氏がいるとかいないとか、もうそんなことはどうでもよくなった。週末に遊ぶ女の子の友達がいるいないのと同じレベルで。ひとりであるほうが、よほど気楽でいい。セックスした後なんか、特にそう。ジムに行った時の体力消耗とたいして変わりないはずなのに、あの清々しさはまるで残らない。疲れたからだにまわりついてくる相手の汗とか、シーツ越しに伝わってくる体温とか、内容のないピロウトークとかばかりがわたしを支配する。そういうものをすべて洗い流すために大急ぎでシャワーに駆け込んでも、一度からだに染み込んでしまったものは、どうしても残ってしまう。一刻も早く相手と別れて、マンションに帰りたいと願うばかりだ。

誰かと密度の濃い時間を過ごす、どうしようもなくぐったりしてしまう。相手にエネルギーを全部持っていられるような感じ。翌日に仕事があるのに夜遊びとかデートなんて、絶対に無理だ。

つまらない夢ばかりみるようになってから、二度寝するのをやめた。誰も知らない朝の世界が、わたしの前に開いた。それは奇妙な夢の二番目が三番目くらいに、新鮮だった。

「きょうも早いね」

すべり台のむこうから聞こえた。少しかすれた声にプラスして、彼はいつもとは違う空気をまとっている。

「おはよ。今日、なんか変」

「ああ、夜勤明けじゃないんだ」

いつもみたいに、ぼろ雑巾じゃない彼を見たのは初めてだ。スウエットの上下を着ている。寝癖なのか、中途半端に伸びた髪の毛があちこちぴょんぴょん跳ねている。ヒゲも剃っていないみたいだけれど、それでもいつもよりはかなりぴつとして感じる。ぼろ雑巾

みたいなのは、仕事のユニフォームのせいかもしれない。

「夜勤明けじゃないのに、来たの？」

家がこの辺にある、と言っていた。この公園は近道なのだ。

「金曜日がいつも夜勤とは限らないんだよ」

ふうん。でもまったく答えになってない。ここで会話は止まってしまったけれど、それはそれで不自由なかった。

夜明けとともに起きてしまうと、なにをしようかわからなかった。夏至に向かって夜は短く、まだ始発も動いていないような時間。ファミレスで、完全な寝不足と遊び疲れたからだにコーヒーを注ぎながら、友人たちと来週の予定を練り、ケータイに集合時間と場所をメモしているような時間だ。

最初の日は部屋中を掃除してみた。次の土曜日は寝起き早々、洗濯に励んだ。けどどちらの後が困ってしまった。日中にやることがなくなつたのだ。仕方なく外をぶらぶら歩いていたら、公園にたどりついた。誰もいない朝の公園は静かで、一日が本当に新しく思えた。それ以来ずっと、土曜日の朝は公園、と決めている。たとえ雨が降っていても。

「朝ご飯」

目の前にコンビニの袋をつき出された。

「おにぎりとパン。好きなほう選んで」

梅干しとチョコ。どちらも捨てがたい。

「両方おいしそう」

「半分こずつ食べればいい」

プラスチックをうまく引き裂いたおにぎりを、まずわたしにくれた。空っぽのお腹を、米粒が隙間なく埋めていく。食べはじめると、急にもう何日も食べていないみたいに空腹を感じる。半分残しておかなきゃ、頭のうしろのほうでわたしがささやいたけれど、気にしなかった。

「お茶、あるよ」

おにぎりの最後の一口を食べてしまってから、やっぱり半分残し

ておくべきだったと少し後悔した。

「全部食べちゃってごめん」

お茶を受けとり、のどに流しこんだ。からだの奥深くからエネルギーが湧いてくるようだった。

「パンはどうする？ コーヒーもあるけど」

「それはきみの分」

わたしは彼に初めて出会ったときから、『きみ』と呼んでいる。見かけで明らかに彼の方が年上とわかっていたけれど、学校をサボった小娘みたいに思われなくなかったので、意識してそう呼んでみたのだ。ただすぐ後になつてから、年上の人をそんなふうに呼ぶ行為そのものが、自分から進んで自分を小娘と認めたようなものだということに気づいた。彼は呼び方についてなにも言わなかったし、名前を聞いてみようとも思わなかったので、なんとなくそのままになつている。

無言のままチョコパンをぱくついている彼の横顔を、わたしはやはり無言でみつめた。夜勤のある仕事をしていることと、公園の近くに住んでいること以外、なにも知らない。具体的にどういった仕事をしているのか、あるいは年齢といったことは尋ねたことがなかった。彼の名前も。聞いてみようと考えたこともあつたけれど、知らなくても困ることはない。それは彼も同じではないだろうか。わたしだって、彼にそういうことは聞かれたことがないから。知らないほうが自然なこともあるのだ。

「今日も掃除と洗濯？」

いつもと同じ、わたしの土曜日の予定。朝ご飯を食べてしまったので、その分ひとつだけすることが減った。

「うん。きみは夜勤明けじゃないから、寝ないよね？」

「そうだね。なにをしようか考え中」

そう言ったものの、考え中にはみえなかった。遠くにある水のみ場に集まった小鳥たちを、彼は眺めているだけだった。

公園をはさんで反対側の道を散歩しながら、ときわ町内をぐるりと一周するようにしてアパートに戻ってきた。レンタルビデオ屋も、モーニングセットを出す喫茶店も、固くシャッターを閉じていた。

夜明けとともに営業する店があればいいのに。わたしは一番の常連客になるだろう。小型のスーパーみたいな店だ。なんでも置いてある。食料品をはじめ、クリーニングやレンタルビデオ、喫茶店とおもちや屋さん。本屋さんも絶対にはずせない。夜明けとともに開店して、暗くなったら閉店する。もちろん年中無休。ボールドカライの水玉模様の内装だったら、もっとすてきだ。そんな店内を、ぼる雑巾みたいな彼が、夜勤明けの疲れたからだをナメクジみたいにひきずって歩いているところを想像してみた。

洗濯機をまわしながら、部屋の掃除を済ませた。ほこりを払ってほうきで掃いて、あちこちをまっ白な雑巾で拭いた。部屋の空気が変わった。最後にベランダで、洗濯ものを干す。この天気ならたぶん、昼までにはすっかり乾いてしまうだろう。見あげた空には電線がガラスを一羽のせて、ゆらゆら揺れていた。

インスタントコーヒーの顆粒をつかって、アイスカフェオレを作った。掃除したての部屋で飲むと、格別においしいから。いつもより甘くしようと思い、グラニュー糖をたっぷり入れた。牛乳は冷蔵庫にあったものをぜんぶつかった。からになった牛乳パックを洗いながら、ガラスになみなみいっぱいアイスカフェオレに口をつける。いつもと同じ味。

グラスを持ちあげて、井戸の底を覗くようにして見ると、ペットシヨップの水槽で腹をみせて死んでいる白い魚みたいに、砂糖がごっそり溜まっている。コーヒーの顆粒という毒に殺られたみたいだ。毒を中和するには、カフェオレを温めて余った砂糖を溶かしてしまおうか、さらに牛乳をそいで余った砂糖の受け入れ容量を増やすしかない。わたしはでき損ないのカフェオレをちびちび飲みながら、しばらくのあいだ迷っていた。グラスの半分くらいまでは、味はいつもと変わらないと信じていたからだ。

実際、ガラスの半分以上を飲んでしまっても、それほど甘さは変わらなかった。掃除したての部屋を澄んだ空気が満たすように、コーヒーの毒と牛乳とうまく溶けたグラニュー糖が胃の中を満たしてしまうと、ガラスの底にまだ溜まっている魚が死んだような砂糖のことはどうでもよくなった。アイスカフェオレを飲んで、お腹がたぶたぶになった以外、何事も事態は変化しなかった。ガラスを電子レンジでチンするわけにはいかなかったし、冷蔵庫にはもう牛乳は残っていないから。

溶けきれないくらいたっぷり砂糖が入ったアイスカフェオレを、公園に現れる彼が飲むだろうか。わたしはガラスを洗いながら思った。底に沈んでいたグラニュー糖は、あっけなく流された。わたしがおにぎりをすっかり食べてしまったあと、彼は茶色い缶のコーヒーを飲みながら、遠くの水のみ場をながめていた。無糖の缶コーヒーはたいてい黒い。彼が飲んでいたのは間違いなく砂糖入りのコーヒーだ。けどもしかして、わたしが飲むことを考えて茶色い缶にしたかもしれない。彼は本当は、ブラックが好きかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9711b/>

ふたり空を夢みる

2011年1月18日14時24分発行